令和７年度

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集

（瀬戸内市優秀賞受賞作品）



©瀬戸内市

瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

はじめに

公益社団法人岡山県青少年育成県民会議及び岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会では、家庭の役割、家族のあり方など、「明るい家庭づくり」をテーマとした作文を毎年募集しており、家庭教育等の重要性について意識の向上に努めております。

令和７年度、瀬戸内市内で６７１点の応募作品があり、その中から瀬戸内市の優秀１０点、優良２１点及び佳作６８点を選定しました。

この文集「ほがらか家族」は、瀬戸内市の優秀作品を掲載したものです。この文集が、日常のしあわせへの気付きや、家庭の教育力の向上の一助となり、青少年の健全育成活動へとつながることを心から願っております。

令和７年１２月

瀬戸内市教育委員会　教育長　萩原　康正
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会　会　長　神坂　俊規

瀬戸内市優秀賞受賞者一覧

〔小学生の部〕

題　　名	所　　属	氏　　名
あたりまえ	牛窓西小学校　１年	岡 本 健 斗
お手つだいバトル	邑 久 小 学 校　２年	千 田 蒼 翔
二人でのりこえた二週間	国 府 小 学 校　３年	小 林 愛 佳
おじいちゃんとお米とわたしの家族	今 城 小 学 校　４年	坪 井 鈴 佳
アヅミンピック	邑 久 小 学 校　５年	安 積 一 翔
大好きな釣りで	邑 久 小 学 校　６年	久保田航生

〔中学生の部〕

祖母１００キロに挑む	邑 久 中 学 校　１年	安 藤 茜 音
伝えることの大切さ	牛 窓 中 学 校　２年	大 濵 英 奈
「田んぼと私」	長 船 中 学 校　３年	近 藤　　碧

〔保護者の部〕

全てのことはメッセージ	邑 久 小 学 校	田 甫 健 一

小学生の部

あたりまえ

牛窓西小学校　一年　岡本　健斗

「じーじーごはんだよ。」
これがぼくのあたりまえ。
ぼくのじぃじは、からだのひだりがわがうまくうごかない。だからかぞくみんなで、きょうりょくしながらじぃじをささえている。
ぼくのへやは2かいで、したのへやがじぃじのへやになっている。あるよるトイレにいこうとおきたら、したからドンッとおとがきこえてきた。ちょっとこわかったけど、したにおりておとがしたほうをむくとそこには、じぃじがたおれていた。ぼくは、
「じぃじ、だいじょうぶ？」
と、こえをかけた。じぃじは、
「おこしてくれ。」
と、ぼくにいった。ぼくはがんばっておこそうとしたけど、ぜんぜんじぃじをおこせなかった。
「まってて。だれかよんでくるね。」
ぼくはうえへあがり、ねているぱぱをおこして、
「じぃじが。」
ぱぱはそのことばだけでとびおきてじぃじのもとへはしっていった。
ぼくもついていこうとしたら、ままやばあばがおきてきた。
「じぃじがたおれてたから、いまぱぱをぼくがおこしたの。」
それをきいたふたりもしたにおりていったのでついていくと、もうじぃじはベッドのうえにねていた。ぼくがじぃじのへやについたことにきづくとぱぱは、
「よくおしえてくれた。ありがとう。」
そういいながらぼくのあたまをなでてくれた。ぼくはすこしホッとした。
そして、ばあばとままになれたてつきでおせわをしてもらって、じぃじはねたみたいだった。
「もうだいじょうぶ。おやすみ。」
と、ままにいわれて、トイレにいき、じぶんのへやでねた。
あさおきて、きのうのことはなにもなかったかのように、ぼくは、じぃじのへやにいく。
「じぃじ、ごはんだよ。」
これがぼくのあたりまえ。

お手つだいバトル

邑久小学校　二年　千田　蒼翔

ぼくには、二才上のお兄ちゃんと二才下の妹がいます。けんかもするけど、毎日にぎやかです。ぼくたち三人は、だれが一ばんお手つだいをしたかをきそう、お手つだいバトルをしています。
お手つだいは、せんたくものをたたんだり、たたんだせんたくもの

をしまったり、おふろそうじをしたり、げんかんのくつをそろえたり、あらいものをしたり、ごみをまとめたり、ごみすてに行ったりします。お手つだいをすると、おとうさんとおかあさんにカードにシールをはってもらいます。お兄ちゃんは、力もちなので、力のいるごみすてがとくいです。妹は、くつをきれいにそろえることがとくいです。

ぼくは、さいしょはとくいなお手つだいがありませんでした。おかあさんがせんたくものをたたんでいたので、手つだってみることにしました。さいしょはかんたんそうに見えたので、タオルをたたむことからはじめました。おかあさんにおしえてもらって、ふくやズボンや、下ぎもたためるようになりました。たたんだせんたくものをしまうことも大へんです。五人分のせんたくものをたたむこともしまうことも大へんだけど、おかあさんといろんな話をしながら、せんたくものをたたむじかんがぼくはすきです。ぼくにもとくいなお手つだいができてうれしいです。

お兄ちゃんと妹ときそいながらお手つだいをすると、まけたくないのでやる気がでます。おとうさんとおかあさんもありがとうといってくれます。かぞくみんながえがおになります。

これからも、お手つだいバトルをしながら、かぞくみんながえがおですごせるあかるいぼくのいえにしたいです。

二人でのりこえた二週間

国府小学校　三年　小林　愛佳

「しあさってからお父さんとこの家をおねがいね。」

お姉ちゃんのたん生日会がおわってお母さんが言った。去年の冬休みに入ってすぐ、お姉ちゃんがせ中の手じゅつで二週間入いんすると聞いていた。お母さんもつきそうので、どんな毎日になるのかお父さんとわたしだけのくらしが始まるのが少し不安だった。でも少し楽しみな気もちもあった。なぜならいつもお父さんは仕事で、わたしがねる前に帰って来るので、休みの日いがいは一しょにすごす時があまりないからだ。二人ですごすのもおもしろそうだなと思った。

それから手じゅつがぶじにおわって、次の日からお父さんと二人の生活が始まった。朝がにがてなわたしたちは、何回もアラームをならしていっしょに毎朝おきるようにした。お父さんが作る朝ごはんは、たまごりょう理が多かった。だけどわたしごのみの味で作ってくれていたのでいつもおいしかった。じゅんびができると同じ時間に家を出て、それぞれ学校と会社へ出発する。「今日もがんばっていってらっしゃい。」とお父さんが毎日いってくれて、とても元気が出た。学校がおわるとクラブへむかえに来てくれて、ばんごはんの買い物をした。たまに「がんばったね。」とごほうびを買ってくれた。

ばんごはんの時間が近くなると、いつもお父さんは、とてもいそがしそうにごはんのしたくをした。いつもがんばって急いで作るのは、毎日ばんごはんは家ぞくでいっしょに食べるというやくそくをしてい

たからだ。
　わたしもごはんのじゅんびを手つだった。ごはんができるとお父さんはスマホをテレビ電話にして、びょういんのお母さんとお姉ちゃんと電話をつないだ。
「今日は何を作ってもらったん？」
「お父さん、チキンナゲットでうさぎ作ってくれたんよ。」
「いいなぁ。わたしも食べたい。」
「びょういんのごはんはどう？」
　たくさん話しながら楽しくごはんをみんなで食べる。少しの時間だけど、しばらく会えていない家ぞくと顔を見て話す事ができるごはんの時間が一日の楽しみになっていた。
「それじゃあ、また明日ね。おやすみ。」
　楽しいごはんの時間がおわると、少しさみしいけれど、お母さんとお姉ちゃんにばいばいをしておふろに入って明日のじゅんびをする。クラブのふくを用意して、ねる前にせんたく物をしまう手伝いもするようにした。今までお母さんがしていた事だけれど、やってみると出来る事がいろいろとあった。
　この冬、お姉ちゃんはもう一ど手じゅつをする。またお父さんとの二人の生活が始まるけれど、次は今より少しでも役に立つように、わたしも自分で出来ることをもっとふやしたいと思っている。

おじいちゃんとお米とわたしの家族

今城小学校　四年　坪井　鈴佳

　わたしは、おじいちゃんが作るお米が大好きです。おじいちゃんは、六十八才ですが、毎日元気に暑い日も寒い日も、朝早くから田んぼ、お米を大切に育てています。そんなおじいちゃんのことをわたしは、そんけいしています。
　おじいちゃんは、
「お米は、人を元気にする力があるよ。」
といつも言っています。その言葉どおりおじいちゃんが育てたお米は、白くてつやつやしていてとてもおいしいです。ご飯を食べるとなんだか心もあたたかくなって家族みんながえがおになります。
　毎年ゴールデンウィークになると、わたしたち家族や親せきがあつまって田んぼのなえどこづくりをします。そのとき、おじいちゃんが
「上手だな。」
とほめてくれます。わたしは、とてもうれしくなります。おじいちゃんは、ただお米を作るだけではなくお米作りの楽しさや大切さを教えてくれます。
「手間ひまかけて作ったものは、人をえがおにさせるんだよ。」
と話してくれます。その言葉を聞くとわたしもなにかを一生けんめいがんばって、人をえがおにできるようになりたいとおもいます。
　夏になると田んぼは、青々とした苗でいっぱいになります。風がふくと、苗がさざ波のようにゆれ、とてもきれいです。おじいちゃんは、

あせをぬぐいながら
「いいお米になるぞ。」
とにこにこしています。秋には金色にそまったイネがあたまをさげ、いよいよしゅうかくのじきです。大きなコンバインでイネかるおじいちゃんの背中はとてもたのもしく見えます。新米がたきあがると、台所にはふわっとあまい香りが広がります。家族みんなで「いただきます。」と手を合わせて、食べるごはんは、世界一おいしいと思います。おじいちゃんががんばって作ってくれたお米を食べながら、わたしは、しあわせをかみしめます。おじいちゃんのお米作りはただの仕事ではなく、わたしたち家族をつなぐ大切な時間です。田んぼでいっしょに作業をしたり、ご飯を食べたりすることで、家族のきずながもっと強くなります。おじいちゃんが元気でいてくれるから、わたしたちの家はいつも明るくえがおでいっぱいです。

わたしも、これから大きくなったら、おじいちゃんのように、だれかをえがおにできるようなことをしていきたいです。そして、この家族のあたたかさをずっとみまもっていきたいと思います。おじいちゃんのお米と同じようにわたしも人の心を元気にできるような人になりたいです。

アヅミンピック

邑久小学校　五年　安積　一翔

わが家には、『アヅミンピック』という行事がある。それは今から四年前、ぼくが一年生のころの夏休みの話。コロナ禍で外出に制限があったり、行事が少なくなっていたので、お父さんとお母さんが発案したお家運動会をオリンピックとかけ合わせて『アヅミンピック』とよんでいる。ぼくと妹は、当時のアヅミンピックがとても楽しかったので動画をよく見返していた。そして、今年の夏休みのある日、お父さんから
「アヅミンピックを開さいします。」
と言われた。ぼくも妹も大喜びした。だけど、今回は前回と少しちがった。前回は、ぼくと妹が朝目覚めるとリビングに国旗がかざられ、プログラムも用意されていた。今回は二人とも大きくなったので家族みんなで内容を考え、準備もすることになった。体も大きくなったし、力も強くなっているので、どんなふうにすればみんなが楽しめるか、ぼくは一晩考えた。そして家族みんなでアイデアを出し合い、プログラムを作り、必要な材料の買い出しにも行った。当日は、競技を始めると、負けん気が強い家族なので何事も全力だった。カーテンレールを使った移動式玉入れ、腹筋パン食い競走、早飲み競走、風船割りレース、と盛り上がった。中でもぼくが発案した頭の上に水の入ったコップを乗せて座って手押し相もうする『サバイバル相撲』は大盛り上がりした。なかなかバランスがとれなくて頭の上から水がふってきて、妹と向き合うだけで笑ってしまい、笑えばまた水がこぼれてしまう。床もぬれ、すべって転んでまた笑う。勝敗よりも家族の笑い声や笑顔がいっぱいだったことがうれしかった。

今回のアヅミンピックをやって分かった事が二つある。一つは、妹はぼくより小さいのにすごく周りを見ていて、ふだんお母さんがしていることを真似ているような行動をたくさんしていた。みんなが喜ぶようにと一人でたくさんのメダルも作っていた。メダルまで気がつく

とは思わなかった。二つ目は、イベントを企画して準備することの大変さだ。でも、大変な反面、みんなに喜んでもらうワクワク感や達成感を感じることができた。四年前のアヅミンピックは参加だけだったので、今回のことが知れて良かった。

この日の夕食時は、

「家の中で水をこぼして笑う家族なんてうち以外おらんよな～。」

「四年後にアヅミンピックしたら家こわれるかもしれんなぁ。」

と話が盛り上がった。こんな家族はめずらしいかもしれないけど、ぼくにとっては、最高で自まんの家族だ。

大好きな釣りで

邑久小学校　六年　久保田　航生

「今日、どこ釣りに行く。」

ぼくとお父さんと毎週休みの日にする会話です。

ぼくは、釣りが大好きです。お父さんも釣りが大好きです。特にブラックバスを釣ることが大好きです。休みの日には吉井川、千町川や近くの池に釣りに行っています。季節によっていろいろな釣り方があり、いろいろな形のルアーやワームがあって小さいブラックバスが連れたり、大きいブラックバスが釣れたりします。大きいブラックバスが釣れるととてもうれしい気持ちと達成感がたまらないです。なのでぼくは本当に釣りが大好きです。土曜日や日曜日以外の日は、家の前にある千田川や東川で釣りをしています。ぼくが、毎日、宿題をした後に釣りをしていると近所のおじいさんやおばあさんが声をかけてくれます。「何が釣れる。」とか「気をつけて釣りせられえよ。」と声をかけてくれます。お母さんやお父さんが早く帰ってきた日は、一緒に歩きながら釣りに付き合ってくれます。お父さんやお母さんと歩いていると、近所の方から野菜をもらったり、果物をもらったりすることもあります。大好きな釣りをしていると、たくさんの近所の人が話しかけてくれたり、おいしい野菜をくれたりといいことばかりです。

しかし、ぼくが大好きな釣りができる吉井川や千町川も台風や梅雨の時期に大雨が降ると、災害が起こる一つの原因になるかもしれません。毎年ニュースを見ていると洪水でたくさんの災害が発生していて、たくさんの人が被災しています。幸いなことに、ぼくが住んでいる地区は大きな災害が発生したことはないです。しかし、いつ災害が起こるか不安になることがあります。だから、いつ起こっても大丈夫なように、お母さんと妹とひなん訓練をしたこともあります。

「航生、釣れた。」

釣りから帰るとお母さんはいつも声をかけてくれます。ここから釣りの話をしたり、今日一日の出来事を話したりしています。家族とのコミュニケーションの時間です。ぼくは、釣りを通して、近所のたくさんの人と話をすることができるようになりました。近所の人の顔や名前や住んでいる家がわかるようになりました。楽しく釣りをさせてくれる川は、災害が発生する原因となるこわい川になることもあります。もし、何か災害が発生しそうになった時、ぼくは、近所の人に声をかけようと思います。ぼくの大好きな釣りは、たくさんの人とのつながりをつくってくれています。

中学生の部

祖母１００キロに挑む

邑久中学校　一年　安藤　茜音

私の祖母は、津山で一人暮らしをしている。昨年、祖父と曾祖母が立て続けに亡くなったからだ。急に一人になった祖母は元気がなくて寂しそうだったので、少し心配になった。しかし、日課の散歩は健康作りのために続けていて、近所の友達との散歩が楽しみだという話をしてくれた。そこで、私は冗談半分で２４時間１００キロ歩行にでてみたら？と勧めてみた。毎年ゴールデンウィークに開催される「晴れの国おかやま２４時間１００キロ歩行」は、父が実行委員をしていて、私もサポーターとして毎年手伝いをしていた。歩くことが好きな祖母にぴったりだと思った。祖母は、「もう６８歳だし、私には無理無理！１００キロなんて絶対歩けないよー。」と言っていたが、興味はあるようだった。なかなか一歩ふみ出す勇気がもてず、悩んでいた祖母に、父が、「悩むくらいなら挑戦した方がいい！」と背中を押した。そして、ついに祖母は１００キロ歩行に参加することを決心した。こうして祖母の人生最大の挑戦が始まった。

１００キロ歩行に挑戦すると決めてからの祖母は見違えるように元気になっていった。今までの散歩は、本番に向けてのトレーニングに変わり、毎日目標を決めて、練習に励むようになっていった。月に２回ある練習会に参加する時は、私の家に泊まるのでいろんな話をしてくれた。練習会で、みんなのスピードについていけずに、心が折れそうになった話や、無心になって歩くことの楽しさを嬉しそうに話してくれた。「何歳になっても挑戦できるんだよ！っていうのを孫たちに見せたい。」と言っていた祖母の笑顔をはっきり覚えている。どんどん元気になっていく祖母をみるのが嬉しかった。

父は何度か１００キロ完歩したことがある。そこで、父にアドバイスしてもらいながら、家族みんなで靴や服を選びに行った。そしてついに本番当日を迎えた。

私は当日サポーターとして、１１キロ地点と３６キロ地点で、炊き出しの手伝いをすることになっていた。祖母は、私がいる３６キロ地点までは、「なんとしてでも行くから待っていてね。」と元気にスタートしていった。１１キロ地点では、まだまだ余裕があり元気な祖母に会えたので少し安心した。３６キロ地点できゅうりの炊き出しをしながら祖母の到着を待っていたが、なかなか姿が見えないのでだんだん不安になってきた。そして、１８時前に祖母が手を振りながら、きゅうりを受取りに来てくれた。日中の暑さと足の痛みで、だいぶ疲れているようだった。それでも「歩ける所までは頑張る！」とまた歩き出していった。私は家族と一緒に５１キロ地点で祖母の到着を待つことにした。２２時前にゆっくりゆっくり歩いてくる祖母の姿が見えた。かなり足に痛みがあり、一旦座るともう歩けないくらい足の状態は悪いようだった。もう気力だけを足を前にだしているという感じだと言っていたので、さすがにもうここでリタイアかなとみんな思っていた。でも祖母は「歩けるところまでは頑張りたい！できることなら１００キロ完歩したい！」とまた歩き出した。私は、歩き出した祖母の背中を見ながら、「ばあちゃん、がんばれ！がんばれ！明日ゴールで待っているからねー。」と叫んだ。夜中は父が祖母のサポートをすること

になっていたので、父に任せて私たちは翌日ゴールで待つことにした。
しかし、翌日の早朝、父から７８キロ地点でリタイアしたと連絡がきた。私は、あの状態で７８キロまで歩いたことに驚いた。大急ぎで祖母を迎えに行くと、祖母は疲れ果てていて歩くのもやっとの状態だった。それでもニコニコしながら、「１００キロ完歩できなかったけど、自分の限界まで頑張ったから後悔はないよ。やりきったよ。」と言っていた。祖母は、１００キロ歩行に挑戦することで、いろんな出会いがあり、いろんな方に助けてもらって１００キロ完歩するという目標は達成できなかったけど、人生最高の思い出ができた。最幸の「感歩」だった。挑戦して本当によかったと、とびきりの笑顔で話してくれた。家族一丸となって挑んだ１００キロ歩行は大成功だったと思う。元気を取り戻した祖母には、新しいことにどんどんチャレンジして、いつまでも元気でいてほしい。私の自慢の祖母だ。

伝えることの大切さ

牛窓中学校　二年　大濵　英奈

「あぁ面倒くさい。」
これが私の口癖になっていた。何か行動する前に必ずこの言葉が出てくる。宿題…面倒くさい、お手伝い…面倒くさい。でもそんな私が一歩大人に近づけた日のことを振り返ろうと思う。
夏休みが始まると、だいたい家にいる私は格好のお手伝い要員だ。その朝も、隣に住む祖父が笑顔で
「英奈ちゃん、ゴミ出し行ってきて。」
と言ってきた。私は、得意の「面倒くさい」を発動し適当に返事をした。そして他のことをしている間にすっかりゴミ出しのことは忘れていた。すると再び祖父が
「英奈ちゃん八時までに出さんと持って行ってもらえんからお願い。」
と言いにきた。仕方なく私は嫌々ゴミを出しに行くことにした。まだ八時前だというのに外に出るとモワっと蒸し暑い。こんな中、重たいゴミを持ってゴミステーションまで歩くなんて。暑さで私はイライラしてきた。そもそもどうして私なの。私だってやることがたくさんあるのに。蒸し暑さと不満の中、投げ捨てるようにゴミを出して帰ってくると、祖父がまだ外に立って待っていた。
「ありがとう。助かったよ。」
祖父の言葉に私の胸がチクッと痛んだ。ありがとうという言葉と、外で待っていた祖父の笑顔に、その時も私は素直になれなかった。
「うん。」
とだけ言ってさっさと家に入った。モヤモヤする気持ちを無視して。本当はモヤモヤの正体を私は知っている。けれどいつも向き合わないようにしてきたのだ。
祖父は何かを手伝うと必ずお礼を言ってくれる。部活や習い事の送迎をお願いした時もすぐに引き受けてくれるし、終了時刻が延びても「遅くまで大変やったな。お疲れ様。」と言う人だ。何で遅くなったか聞かれたことは一度もない。待たされていた祖父の方から「お疲れ様」と言うのだ。祖父だって自分のやりたいことがあるはずなのに。家族のために自分の時間を使うことをいとわない祖父を、私だって尊敬している。けれど感謝の気持ちをきちんと伝えているかというと答えはノーだ。幼い頃は自然に言えていた「ありがとう」を最近いつ言った

だろうか。いつから私は意識しなければ「ありがとう」が言えなくなったのだろう。私はそんな自分と向き合うのが嫌だったのだ。そしてその罪悪感からチクッと胸が痛むのだ。エアコンの効いた涼しい部屋でいつしか私はそんなことを考えていた。

「ありがとう」はわざわざ言わなくても日々の生活は続く。「ありがとう」を言わなくなった私に、思春期だから、と周囲も何となく理解してくれているし、私もきっとそれに甘えている。けれど、言わずにやり過ごしていると、いつの間にか言えなくなるのが「ありがとう」だ。そして言わずにいるうちに、してもらうのが当たり前になり、誰かのために何かすることも、さらには自分のためですら面倒だと思うようになっていた。

母から祖父の若かった頃の話を聞いたことがある。北陸で育った祖父は、雪の中、家族全員の洗濯物を手洗いするお母さんのために、中学生から新聞配達をして洗濯機を買ってあげたそうだ。また兄弟が多かったので、両親に負担をかけたくないと言い、自分で学費を稼ぎながら大学を卒業した。そんな祖父を私は本当に尊敬している。祖父は「面倒くさい」と思うことはあるのだろうか。恥ずかしさや面倒くささに流されず、今度ゆっくり聞いてみたい。祖父の生き様や言葉を通して「ありがとう」を口癖にしたいと今の私は素直に思う。祖父の孫になれた私は幸せ者だ。

「ありがとう、じいちゃん。」

外に出て入道雲を見上げる。さっきと蒸し暑さは変わらないが、いつしか胸の痛みは消えていた。

田んぼと私

長船中学校　三年　近藤　碧

私の家には田んぼがあります。前までは祖父と父がお米作りをやっていましたが、祖父が亡くなってから家族みんなで協力しながらがんばっています。父が祖父から、おもなことを教えてもらっていたので、次は私たちが父からおそわるようになりました。稲の栄養状態をみたり、肥料の量を考えて少なくしたり多くしたりもしました。雑草がはえすぎてしまうと稲に栄養がいきわたらず、雑草に栄養分をとられてしまうので除草剤をまいたりするということも教えてもらいました。夏の仕事は大変で苗代をするときも、暑い日で泥につかりながら汗水をながして一生懸命がんばりました。いままで父と祖父にまかしていたぶんやったことがないことばかりでものすごくつかれましたがいい経験をすることができました。秋には稲刈りがあり緑色だった稲がこがね色になり、田んぼの横を通るたびに成長を感じることができました。父や母がコンバインを運転しているすがたをみて、家族での協力はとてもいいものだと思いました。モミだったものが玄米になり精米機を通して袋詰めをするのを手伝だったときに、袋がぶあつくてひろげるのにもくろうしたし、お米を詰めて持ちあげるときはおもたくて、２人でないともちあげれないのでものすごく体力が必要ということがわかりもっと自分をきたえ直そうとも思うこともできました。そして新米となり家族の食卓にでたときには、みんなが「おいしい」といってくれたことがすごく心にのこっています。

今年の春に、父が仕事中にけがをしてしまいました。お米作りがはじまる直前だったのでどうなるんだろうと不安になりました。機械を使う事、力仕事などの父の役目をどうするんだろうと心配しました。父ができないことを、母にしてもらいながら田植えの準備をしていて、私も何かできないかと思い田植えを手伝いました。手伝う前は手が泥につくのが嫌だったり、めんどくさいと思っていました。ですがいとこが手伝いをしに来てくれることになって、自分のほうが田んぼから家が近くていつでも行けるのに遠いところからわざわざ来てくれて「手伝うよ」と言ってくれ手伝ってくれているのに自分が手伝わなくてどうするんだと思い家族といとこ、親せきの人も手伝ってくれてがんばりました。そういう手伝ってえた経験と父のけがをきっかけで農作業について興味を持つことができました。そのため今の自分は農業ができる高校に進みたいと思えるようになり、自分の進路について見つめ直すことができました。農業をすることはけっして楽なことではないと思います。その中で自分ができたことを考えてじっせんしていくことで、家族のためにもなるし、自分のことも見つめ直すことができます。なので前まで考えたことがなかった自分の役割を考えることができるようになりました。今の自分が行きたいと思った高校に入学できたら、お父さんの手伝いもできるはばが広がると思うし、自分から進んでできるようになると思います。自分の役目、自分の将来も考えながらこれからがんばっていきたいと思います。

保護者の部

全てのことはメッセージ

邑久小学校　田甫　健一

育休を取得し、子どもたちとじっくり向き合う時間を手に入れた。仕事に追われていた日々とは違い、朝の支度から保育園の送迎、小学校への付き添い登下校、子どもとの食事、お出かけ、お風呂や寝かしつけまで、まるごと一緒に過ごせる毎日。さあ、優しさと思いやりをもって子どもに接するチャンスだと、最初は張り切っていた。

ところが、実際の私はどうだっただろう。

七才の長男に対しては、朝の支度や寝る前の段取りの悪さがこれまで以上に気になった。食事中もお茶をこぼしたり、箸を毎日のように落としたりと、ちょっとした失敗を繰り返すことに目がいく。弟が困って泣いていても気付かず、指摘されて初めて動く姿に「もっとちゃんと見ていなさい」と口をとがらせてしまう。本格的に始めたヨットでも、コーチの指導をもらったそばから全然違うことをしてしまい、「話を聞いていたのか」と腹が立ってくる。

三才の次男は「お兄ちゃんパンツをはく」と意気込むものの、連日のようにおもらし。食事のたびに「これは嫌い」「あれは食べない」と言われ、毎度ため息をついてしまう。すぐにどこかへ行こうとしたり、勝手にいろいろなものを触って別の場所にもっていったりして全く片付けない。

三男はまだ赤ちゃん。泣く理由が分からず、あやしても泣き止まないこともある。夜泣きに起こされたあと、うとうとしながら「なんでそんなに泣くの…」と小さくつぶやいたこともあった。

三人の息子たちの理解しがたい言動が一人ずつならまだしも、急いでいるときに限ってそれぞれが思わぬ行動をしたり、次男が泣き出すと三男もつられて泣き出したりということもしばしば。こんなふうに、日常の中にはイライラの種がいくつも転がっている。

子どもと向き合う時間が長くなるにつれ、ほんの些細なことに対して「もっとこうしてほしい」「なんで分からないの？」と、求め過ぎてしまう自分がいた。そして徐々に「せっかく育休を取って子どもと向き合う時間が増えたはずなのに、どうしてこんなに優しくなれないんだろう」と、自分自身に問いかけることが増えていき、夜、寝顔を見ながら反省することもよくあった。

そんな自分を責めながら過ごす中で、ある夜、ふと耳にしたのが松任谷由美さんの『やさしさに包まれたなら』だった。学生時代から何度も聴いてきた大切な一曲。どこか懐かしく、安心できる音色と温かな歌詞にいつも励まされてきた。けれど、その夜は違った。

〝やさしさに包まれたなら　きっと　目に映る　すべてのことはメッセージ〟

この言葉が、まるで自分に語りかけているように胸に響いた。思い通りにならない現実に苛立つのは、私自身が〝こうあるべき〟という思いに縛られていたからだと気付いたのだ。

子どもが泣くのも怒るのも、言うことを聞かないのも、全て何かのメッセージかもしれない。それは、「ちゃんと見て」「気付いてほしい」という子どもなりのサインなのかもしれない。学校や保育園で一生懸命エネルギッシュに活動してきて、「疲れたよ」「甘えたいよ」「パワーを充電させてよ」と家庭に安心感を求めているのかもしれない。そう思うようになった。

それからは、毎日カーテンを開ける時間を少し大切にするように意識している。〝静かな木洩れ陽の　やさしさに包まれたなら〟という歌詞のとおり、日差しのやわらかさに心がふっとほどけることがある。「また今日も理想の父親ではいられないかもしれない。でも、優しさを忘れずにいよう。子どもが安心して帰ってこられる灯台のような家庭を目指そう」と自分に言い聞かせるようにしている。

子育てを通して私は今、「優しさに包まれる」という感覚について考えている。それはいつも優しい人間であるということではなく、安心してチャレンジできるということ、うまくいかないことも振り返って笑えること、子どもに「ありがとう」や「頑張ったね」と素直に伝えられること、そうした小さな積み重ねの中にあるのではないだろうか。家庭は、外に飛び出す子どもたちが帰ってくるとき、安心して目印にできる灯台のような場所でありたい。そんな安心感のある家庭こそが、今の私にとっての〝明るい家庭〟だと思う。

子どもは、日々たくさんのメッセージを私に届けてくれている。「パパ、こっち見ててね」「こんなことができるようになったよ」「応援しててね」その声なき声に耳を澄ませながら、今日もまた目に映る全てのことに心を傾け、子どもたちと一緒に生きていこうと思う。

瀬戸内市優良賞〔小学生の部・中学生の部・保護者の部〕受賞者一覧

題　　名	所　　属	氏　　名
ママにおこられないようにするほうほう	邑久小学校　１年	田甫大吾
わたしのひいじいちゃん	邑久小学校　１年	齊藤若奈
わたしのしあわせのにおい	牛窓東小学校　２年	河本まひな
ぼくのしごと	牛窓北小学校　２年	石井奏多
弟がうまれた	邑久小学校　３年	島本陸玖
大すきだよ。	邑久小学校　３年	坂井麗磨
お手つだいの意味	邑久小学校　４年	松島奈南
静かな二週間	邑久小学校　４年	延谷実祈
私のおばあちゃん	邑久小学校　５年	下山柚乃
家庭菜園	行幸小学校　５年	竹原悠真
成長した弟	邑久小学校　６年	浅野陽貴
「石川に行って感じたこと」	行幸小学校　６年	寺津　航
「カブトムシと家族の家族」	牛窓中学校　１年	岡﨑咲和
小学生になった妹	長船中学校　１年	赤木梨沙
大切な家族	邑久中学校　２年	小林夢來
「私の家族」	長船中学校　２年	上田梨暖
家族のために	邑久中学校　３年	嘉數ひかり
僕らの夏	長船中学校　３年	石原歩和
娘たちの成長に触れて	行幸小学校　保護者	藤岡穂美
我が家の一年生	行幸小学校　保護者	池田吉子
居場所づくり	牛窓中学校　保護者	山根亜生

瀬戸内市佳作〔小学生の部・中学生の部・保護者の部〕受賞者一覧

題　　名	所　　属	氏　　名
わたしのかぞく	牛窓東小学校　１年	國　岡　里　帆
ぼくのおかあさん	牛窓北小学校　１年	上　江　健　心
たのしかったりょこう	国府小学校　１年	青　木　　蓮
ハンバーグはしあわせのあじ	行幸小学校　１年	清水彩也香
お姉ちゃん	牛窓西小学校　２年	柿　本　　明
わたしとおにいちゃんの大ぼうけん	邑久小学校　２年	安　積　世　絆
大すきなポチ	邑久小学校　２年	遠　藤　美　結
かぞくのおうえん	邑久小学校　２年	江　口　紘　斗
ぼくのいもうと	今城小学校　２年	宮　川　蒼　大
ぼくのおかあさん	美和小学校　２年	嶋　村　大　耀
エイのじいじ	国府小学校　２年	福　池　春　人
ぼくもママが大すき	行幸小学校　２年	岡　部　優　生
お母さんのべんとう	行幸小学校　２年	林　　桜　右
ブンとごま	牛窓東小学校　３年	服　部　和　果
赤ちゃんが生まれたよ	牛窓西小学校　３年	松　村　翔　希
お母さんはスーパーヒーロー	牛窓北小学校　３年	石　井　陽　葵
最高のお姉ちゃん	邑久小学校　３年	橋　本　紬　麦
楽しい食たく	邑久小学校　３年	江口すみれ
家ていの中でのわたしの仕事	今城小学校　３年	湯通堂心彩
大好きなしょうちゃん	裳掛小学校　３年	横　山　愛　莉
いっしょに泳いだ二十五メートル	美和小学校　３年	北　谷　由　佑
わたしのパパはたんしんふにん	国府小学校　３年	志　賀　海　音
おてつだい大作せん	行幸小学校　３年	行　司　彩　七
小さなお母さん	行幸小学校　３年	藪　木　結　愛
わたしの家族のすごいところ	牛窓東小学校　４年	野村朱々葉
わたしとのあ	牛窓西小学校　４年	柿　本　　和
妹の面白いところ	牛窓北小学校　４年	神　宝　大　和
がんばる家族のすがたを見て	邑久小学校　４年	水　田　花　音
わが家のアイドルムーンちゃん	邑久小学校　４年	田　坂　時　和
私のゆめ	国府小学校　４年	久　山　詩　織
お米あらい	国府小学校　４年	三　枝　翔　平
ぼくのお兄ちゃん	行幸小学校　４年	藤　田　煌　翔
わたしのお姉ちゃん	行幸小学校　４年	竹　本　夏　稀
これからもつなぐ	牛窓東小学校　５年	上　田　咲　李

題　　名	所　　属	氏　　名
今がある幸せ	牛窓北小学校　５年	末宗昊征
家族みんなで頑張るぞ	邑久小学校　５年	髙雄咲愛
ぼくは三人兄弟のキャプテン	邑久小学校　５年	正富飛馬
私のスーパーひいおばあちゃん	今城小学校　５年	永山結愛
ぼくの家に住むかいじゅう	国府小学校　５年	柴原堆我
ありがとう家族のやさしさ	国府小学校　５年	小林優莉
ひいおじいちゃんとうどんとあま夏	行幸小学校　５年	大森心陽
僕と地域の関わり	牛窓東小学校　６年	大西健太
看護の日	牛窓北小学校　６年	真木彩花
かわいい弟	邑久小学校　６年	錦織叶空
ぼくの大すきおじいちゃん	今城小学校　６年	阿部一護
将来なりたいもの	裳掛小学校　６年	井上隼輔
かわいいねこたちとの日常	美和小学校　６年	黒原志和
最近よく考えること	国府小学校　６年	播本弥耶
中国大会での挑戦と家族の応援	国府小学校　６年	竹内花音
小さな命がつなぐ家族	行幸小学校　６年	森本　　樹
お母さんが座れない理由を考えてみた	邑久中学校　１年	小林諒太朗
きっかけをくれた人たち	邑久中学校　１年	山形まこ
クラブチームに入る上での約束	邑久中学校　１年	太田　　凜
僕の祖母	長船中学校　１年	竹本蒼佑
私の家族は日々笑顔	長船中学校　１年	野﨑直音
チャンネルのきりかえ	邑久中学校　２年	阿部華愛
私の弟	邑久中学校　２年	児玉茉結
僕から見た祖父	邑久中学校　２年	神谷蓮佑
書道を通して学んだ感謝	長船中学校　２年	寺本奈央
私の家族	長船中学校　２年	米﨑潤葉
挨拶	牛窓中学校　３年	児玉美人
家族で駆け抜けた一週間	邑久中学校　３年	北村莉菜
頑張る家族を見て	邑久中学校　３年	渡邊聖尚
言葉だけじゃ足りない私の家族	長船中学校　３年	野口らいか
我が家、朝のルーティン	国府小学校　保護者	盛　　博貴
「長男の言葉に救われた」	行幸小学校　保護者	西村智子
三十分の大切な時間	行幸小学校　保護者	山下由美
「私の今があるのは」	行幸小学校　保護者	林　　由香利

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集
（瀬戸内市優秀賞受賞作品）

令和７年１２月発行

編集発行
瀬戸内市教育委員会
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会
〒７０１－４３９２　瀬戸内市牛窓町牛窓４９１１
瀬戸内市教育委員会社会教育課内